書評と紹介

塩沢美代子著
『語りつぎたいこと
―― 年少女子労働の現場から』

評者：鹿野　政直

第二次大戦後の民主化の時期に，労働省婦人少年局長山川菊栄のもとで婦人労働調査係長を務めていた大羽綾子が，調査のため群馬県の製糸工場を訪れたさいの回想の一節が，頭に焼きついている。「寄宿舎に泊めてもらったんだけど，工場の給食で天ぷらのご馳走が出た。その油がね，繭から糸をとったあとのサナギの脂なんですよ」，「これはまいった」。そんな体験から大羽は，「判断を下すときは実際に調べてみること，それが山川さんの精神ですが，まさにその通りでしたね」と語るのだが（小川津根子を聞き手とする「大羽綾子さんの歩いた道」，大羽綾子『男女雇用機会均等法前史―戦後婦人労働史ノート―』未来社，1988年，への「栞」），わたくしには，当時の女子労働者の待遇，いやそれ以上に，雇用者たちの女子労働者観を瞬時に突きつける話であった。

塩沢美代子は，その民主化政策が切り替わるころ，組合員の8割以上を女性が占める全国蚕糸労働組合連合会（全蚕糸労連，のち繊維労連）書記の職をえた。そこでのべられているところによると，本書の著者は，物心ついたとき「なぜ男の子と女の子は別扱い？」の疑問を発し，十五年戦争と重なる時期に勤労動員を含めての全教育期間を過ごし，社会事業従事者を育成する学科としての日本女子大学校家政学部第三類に進んでそこを終えたとある。社会に向かうに当たってそんな角度を身につけるに至っていたこの女性は，それだけに，戦争放棄と男女平等を謳う新しい憲法を幸福感いっぱいに受けとめた。その新しい社会で，自分がもっとも納得できる生きかた・働きかたを模索した結果，到達した職場となる。

といって，それまでの塩沢美代子が，「女工哀史」に集約される女性労働の現場に密着して生きてきたわけではない。むしろ逆に，動員先の工場で初めて，小学校を終えるとすぐ働きにでて生活を支えている人びとの存在を“発見”したことの衝撃が，第三類進学を含め模索への出発点をなすという境遇にあった。疎開先での父の死を，さらっと「私は身軽になった」と書いているところにも，懸かっていたイエの重みが偲ばれる。そういうなかからの，「すさまじい執念が天に通じて」の，意にかなう職場との巡りあいであった。「女子労働者の役に立ちたい」との理想に輝く姿が立ちのぼってくる。

導入が長くなってしまったが，本書は，こうして出発した著者が，労組の女性専従として，胸中に燃える火を掻き立てつつ切り開いていった軌跡を，当事者の筆をもって開示した作品である。おそらく人柄と越えてきた風雪のなさしめるところなのであろう，きびきびした語り口が印象的である。Ⅰ「生い立ち――一五年戦争のもとで」，Ⅱ「自立――戦争放棄の憲法に無限の喜び」，Ⅲ「研修――GHQの命令でアメリカへ」，Ⅳ「運動――製糸工場・生産の主体は

女子労働者」，Ｖ「闘争――怒りに燃えて」の5章から構成されているが，おのずからにして，自分史という面と戦後女性労働運動史という面とをもち，それらが絶妙にあざなわれている。

自分史としてみるとき，それは一人の人間の限りない成長史，という以上に自問をつうじての自己と課題の発見史をなしている。自他ともに「頭でっかち」と認める情熱だけを推進力として飛び込んだだけに，「小学校の理科の時間に，繭だけは見たことがあるが，桑の木も蚕も製糸工場も見たことはなかった」塩沢にとって，職務が学習の場でもあったのは事実だが，その情熱ゆえに，身を置き始めた環境を貪欲に吸収した。

それ以上に，労働の最底辺に据えられているというべき女子労働者の存在を，原点として揺るぎなくもちつづけたために，それに照らしての不条理を明晰に見分けることができたばかりでなく，不条理に挑みかかる果敢な行動力，さらに不条理を克服するに当たっての戦略・戦術まで案出する力を蓄ええた。そのことが疑いもなく，著者を，原則に忠実にしかし状況に柔軟に打開策を見出してゆくという，有能な書記としていったのであろう。

さらにいえば，経験を，現場から眼を開かされることの積み重ねと捉える姿勢が，著者を，教条主義から無縁とし，働きかける相手とのあいだに「本音」でのつきあいを成り立たせる雰囲気を作ったらしいと，叙述の随所に読みとれる。それだけ，働きかけの相手となった女性たちの厚い信頼をかちうる結果をもたらした。もっとも抑圧されている人びとへの視線は，アメリカ研修にさいし志願して南部の黒人差別を身体に染みこませたり（Ⅱ章），繊維労働者への無法同然の不当労働行為に怒りをたぎらせたりしたところに（Ⅴ章），躍如として現われている。それらをもって，塩沢がたんに初心を貫いたとするのは必ずしも当たらない。むしろ著者は，初心をたえず豊饒にしていったとの感が深い。

戦後女性労働運動史としてみるとき，著者の焦点は，副題にある「年少女子労働」にぴたりと合わされている。だがそれは，数ある労働のうちの特殊な一部門を意味しはしない。むしろそこにこそ，賃労働というものの本質と女性労働というものの本質が，合わさって凝縮しており，その意味で普遍性を体現している。いい換えれば，社会を動かす急所＝梃子としての位置を占める。少なくとも，そこを置き去りにしての社会“改革”は，改革の名に値しないとの確信が，塩沢を貫いていたようにみえる。そうして「年少女子労働」とは，戦前の日本資本主義の働かせかたを一言でいいあらわす特徴であったばかりでなく敗戦をはさんで戦後も持続する「女工哀史」の，同義語にほかならなかった。

その「女工哀史」的状況の克服に向っての，精魂こめての奮闘の足掛け15年間が，本書の内容をかたちづくっている。読みつつ，いまは歴史として語られている一コマ一コマの情景が，あらためて状況として目前に立ち上がってくるのを覚えた。

すでに1920年代，山川菊栄が「婦人の特殊要求」をいいだしたとき出会った反応なのだが，組合の二重組織になるとの反対論のなかで，塩沢は，婦人懇談会を傘下のどの組合にも作ってゆき，それらが，個別企業の枠を超え，連帯して活動する条件を整えた。そうした活動に当たっては，「女工哀史」的労務管理を象徴する寄宿舎制度は，逆に，オルグ活動にとって好都合な環境となった。その寄宿舎生活を前提とした「火鉢かくとく闘争」「おかずかくとく闘争」など「ユニークなたたかいの数々」は，脱「女工哀史」に向けての典型的な実践であった。本書はそれらについての貴重な証言を提供してい

る。

活動の拠り所となったのは，労働組合法で保障されている諸権利であったが，視野は，その枠内に終始していたわけではない。著者は，「年少労働問題を世論に訴える必要を痛感」して，労働の実態についてアンケートを行い，その結果をもとに労働科学研究所に疲労度の調査を依頼し，年少女子保護の労働基準法の改正を提言してゆくところにも踏み込んでいる。上記のアンケートについて付言すれば，1400人に向けて行われたそれは，1393人の有効回答をえたとある。労働強化の問題がいかに切実であったかを，如実に示す数字として胸を衝かれた。

それでいてこの運動者は，あるときは，女子労働者が二十歳を過ぎるとたいてい結婚のため故郷へ呼び戻され，運動をまた一から始めなければならなくなるのをいやというほど経験して，組合活動にとって「“賽の河原に石を積む”とはこのことか」と落ち込み，また他のときは，組合語を「我々は」から「私たちは」に変えようと，男子幹部に言い募らなければならなかった。そんな著者が“絶望”の囚われびととなることがなかったのは，日々の状況への対応を，人権と民主主義の実現への長期的な展望と重ねあわせていたためである。繊維産業の女子労働者という絶対多数を背景としながら，その実，「生産担う女性と男性役員の軋轢」（Ⅳ－3）に語られているように，絶対少数者として立ち向かわなければならなかったその闘いは，確実に橋頭堡を築いてゆくこととなった。同時にその闘いは，条件獲得闘争であるとともに，あるいはそれ以上に意識改革闘争をなし，その点でこれからもつづく課題を提示している。そうしてそれらすべてを，「女子労働者自身が，“女工哀史”の延長線上にあった労働実態を，どう変革していったか」の「物語」として語るところに，著者のさわやかさがある。

だが，女性労働者を主体としての民主化に向けての闘いは，再建された繊維資本によってねじふせられてしまう。労務政策の貫徹は，脱退や変質という経過で労働者組織の御用組合化を促し，また組織の先細り化を招いた。「大手企業にとって，女性の活動が企業の壁を破って発展したことや，労働科学研究所の疲労調査など，もっとも嫌うことだったろう」と著者は書いている。そのことが，狙い撃ち同然にと意識させるかたちで塩沢を追い込み，労連からの退職を決意させるに至った。

「女工哀史」は，高度経済成長をへて，豊かさの獲得や産業構造の変化によって，過去のものになってしまったとの気配が濃い。だが，労務管理の本質が変わらない以上，「女工哀史」を“清算”してはならない，そこには資本主義経済の宿命がまぎれもなく露呈している。そのことこそ塩沢が，もっとも「語りつぎたいこと」なのであった。著者は，近年，労働（運動）史研究で頻用されるフェミニズムやジェンダーという言葉を，一度も使用していない。しかし「女性の活動」を「企業の壁を破って発展」させた「元凶」として，事実において，それらの言葉によって提起されてきた視角の先頭に立つ一人であった。そうしてそんな一人であることにふさわしく，『メイドイン東南アジア』の世界へ旅立ってゆくこととなる。本書に描かれた経験はその意味では，著者のその後にとっての沃土をなしている。

（塩沢美代子著『語りつぎたいこと—年少女子労働の現場から』ドメス出版，253頁，2004年3月，定価2200円＋税）

（かの・まさなお　元早稲田大学文学部教授）